



アフガニスタン民衆とともに

学生YMCAシニア
ベシャワール会現地代表
2003年ラモン・マグサイサイ賞（アジアのノーベル賞）
平和・国際理解部門受賞

中村 哲さん

内戦の火が燐り続けているアフガニスタンは今、中村さんが赴任した20年来で最悪の状態にあるという。伝染病、貧困、そして、2000年から今日まで続く大干ばつにより、被災1200万人、餓死線上に100万人がいると言われる。中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されたベシャワール会は現在、医療活動とともに水利事業にも力を入れている。

中村哲さんは、福岡市生まれの57歳。九州大学学生YMCAシニア。学生時代、学Yの指導者滝沢克己氏（カール・バルト神学）に、「キリスト教であろうと仏教であろうと、行き着く先は同じ」と教えられた。それまで漠然と考えていたことにピタリと合い、「これだ」と思ったという。若い時から登山が好きで、パキスタンの山々にも登っていた。それが縁で、1984年、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）からベシャワールへ派遣され、以来、ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携わっている。

キリスト教徒である中村さんを、イスラム教徒である現地の人々は「同じ『神』を信じる者として受け入れてくれている」と感じるという。農村のジルガ（長老会）の支持と保護を

得て活動してきたが、自衛隊のイラク派遣の影響で、親日的なアフガン民衆の感情にも陰りが見られる。そんな中、現地で身を投じて働く決意の底に何があるのかと聞くと、「理屈抜き」という簡単な答えが返ってきた。「人間は話を聞くだけではわからない。いざという時どのような行動をするか」。診療所への銃撃事件（1993）、用水路作業現場への米軍ヘリの誤射事件（2003）など死と隣り合わせの状況の中で活動してきた人の言葉の重みだ。言葉の虚飾を徹底して嫌う。日本のクリスチャンは「自分の信仰を人にわかる言葉で語る努力をすべき」と厳しい。

反面、若者を見る目は温かい。「日本の若い人も捨てたものではない。まず自分でやってみて、その中で粘り気、人間関係のあり方などを学んでいけばいい。試行錯誤は覚悟の上で任務を与えることが大切」。今、ベシャワール会では、20代の日本人スタッフ十数名が現地で活動している。お子さんのことに話が及ぶと、「一人ひとりが持って生まれた性質は、親にはどうにもできない。5人いるとそれがよく分かって面白い」と相好を崩した。

魂の声に忠実に生きようとする人の、厳しさを裏打ちする優しさが見えた。